

丸山仁司(編著)

「PT, OT なら知っておきたい からだのこと」

黒川幸雄

(埼玉医科大学保健医療学部理学療法学科)

本書の特徴は、第一に理学療法業務の中核にあたる部分の知識を改めて確認し、そこにすべての紙数を費やした点である。では理学療法業務の中核とは何か、それは運動(動作含む)である。運動を評価し、運動の問題点を抽出し、課題解決型で治療・指導にあたり、その時に主に運動を治療手段とする、すなわち運動療法を手段とすることである。

人間の運動を司る器官は、筋肉、骨、腱、関節、運動を調節する感覚器、筋肉に運動のエネルギーを送るエネルギー源、酸素・栄養・代謝などに関わる呼吸器・循環器などである。もちろん、運動を考える場合に神経系の働きを除外するわけにはゆかないのであるが、ここでは敢えて「効果器官」に焦点をあてて知識の整理に徹していることがユニークである。すなわち、理学療法にとっての中核以外をできる限り削ぎ落とし、非常にコンパクトにして提示し、主要な必要条件に限定し、解りやすくしている。

これまでの歴史をふり返ると、理学療法士は運動に関してどの職種よりも優位な立場にあったが、ここ最近、その地位が大変あやしくなってきた。この感慨は、筆者の思いすごしであれば幸いである。改めてや

や奇異な感じがするかもしれないが「運動のオーソリティーとしての危機管理!」ということについて考えてみよう。理学療法士は、法律第 137 号と共に生まれた。そこでは理学療法の目的を「主としてその基本的動作能力の回復を図る」と規定しており、40 年以上が経過した今もこの文言は生きている。

しかし、それを動かす舵取り役の理学療法士の質が問われ始めている。職種のアイデンティティーが内部と外部の両方からぐらついてきている。この危うさが、危機として顕在化し、臨界域を超えたら大変なことである。過去には理学療法士は運動についての基礎から臨床までをオーサライズしてきた、と自負していた。しかし、今日その地位は確実に担保されていると言っているだろうか。規制緩和の中で、落ちるところまで落ちる可能性をはらんでいると言っては言い過ぎだろうか。危機を意識し、危機管理をスタートさせよう。

本書は、その範囲を運動に集約している。したがって理学療法士を目指す若い学生に理学療法の特徴を示す上で有用であり、特に 1, 2 年生は必読である。また、同様に上肢の運動などに深く関わる専門職である作業療法学科の学生、保健医療福祉分野で日常生活動作や行為などに関わる専門職種にとっても、実践に直結した知識整理に大いに役立つものである。

●B5 判 116 頁

定価 2,520 円(本体 2,400 円+税 5%)

2008 年 遊戯社・刊